

「アリアドネの糸玉」としての 地方分権改革

日本社会事業大学学長・東京大学名誉教授

神野直彦

2020年12月12日

1. 「全般的危機」から抜け出す「アリアドネの糸玉」

- (1) 重化学工業を基軸とする工業社会から、ポスト工業社会へと移行する「エポック」としての「危機の時代」。
- (2) 「参加なき中央集権的所得再分配国家」としての福祉国家の行き詰まりを打開し、ポスト福祉国家をデザインする導き糸としての地方分権改革。
- (3) 人間の生活と未来を決定する権限を、社会の構成員ひとり一人に権限委譲をする。

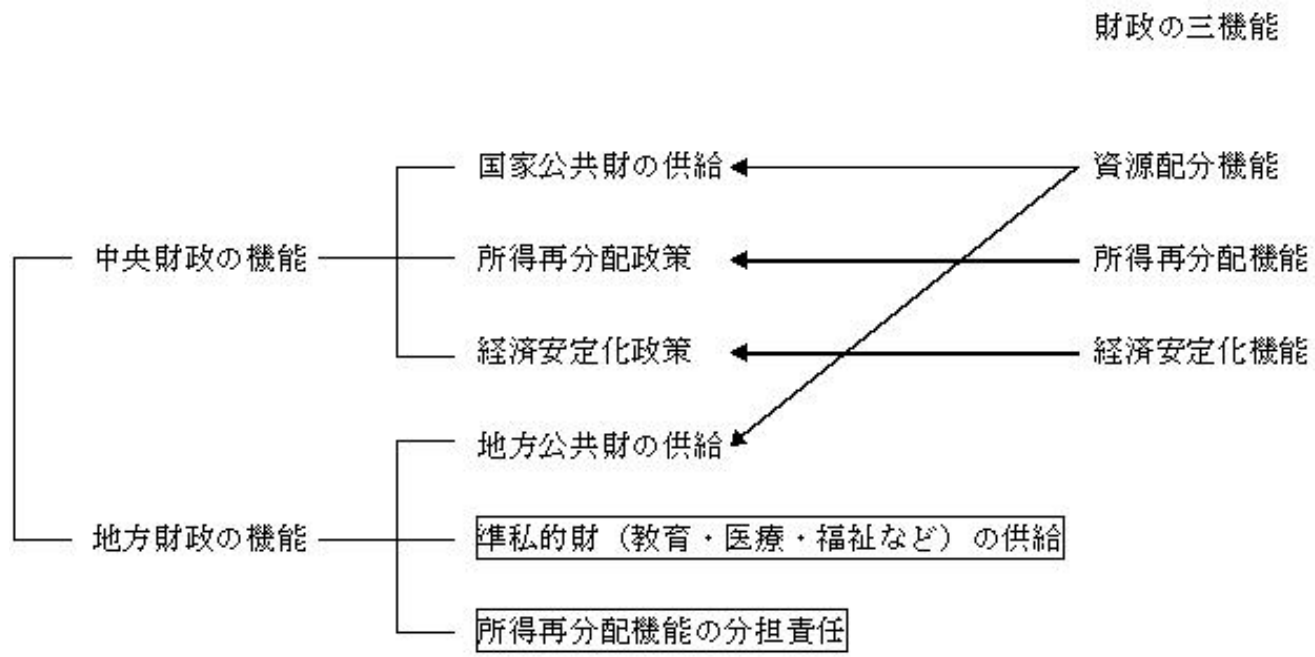
2. グローカリゼーション(glocalization)

ーグローバル化とローカル化

- (1)1973年の石油ショック＝福祉国家を機能させる前提条件としてのブレトンウッズ体制の最終的崩壊→生活要素が国境を越えて自由に動き回るボーダレス化
- (2)古き時代と新しき時代が楔型に混在する危機の時代に。
- (3)グローバル化に対応して生活保障責任をも引き受けるために、1985年の「ヨーロッパ地方自治憲章」を制定し、地方分権を推進する。

3. 「社会保険国家」から 「社会サービス(社会投資)国家」へ

- (1) 中央政府の現金給付による所得再分配の限界を地方分権を推進して福祉、教育、医療という対人社会サービスによる生活保障で補強する。
- (2) こうした社会保障はポスト工業社会への参加保障である。



* の囲みは拡大される地方財政機能

4. 画像から操作像へ

- (1)地方分権改革の『総括と展望』で制度改革の成果を動かしながら、地方住民主導、地方自治体主導の地方分権改革に切り換えていく。
- (2)団体自治への地方分権改革を動かすことで住民自治の活性化を図る。
- (3)地方分権改革の主体である社会の構成員のひとり一人が、生活と未来の決定に参加し、その成果を実感していく循環を創り出す。

5. 「全般的危機」を襲うパンデミック

- (1) 「封建時代」の全般的危機—農業社会から工業社会へのエポック。
1347年から1353年までに、「黒死病」により少なくともヨーロッパの人口の3分の1が死亡。

- (2) 軽工業社会から重化学工業への転換期にはスペイン風邪が襲う
第一次大戦中の1918年から翌年にかけて流行し、死者の数は2500万人と第一次大戦と第二次大戦の死亡者と合計したよりも多い。

- (3) 工業社会からポスト工業社会への移行期に、「コロナ危機」に襲われていることを忘れてはならない。
「コロナ危機」の克服は、同時にポスト工業社会の形成と結びついている必要がある。

6. 国民から遠い政府となり、民主主義への不信が生じた「危機の時代」を乗り越える

(1)スウェーデンの非ロックダウン型の「コロナ危機」対応。

権力的統制・規制は最小限に留め、理性ある国民の責任ある行動に委ねる。

(2)「国民が連帯してコロナ危機に立ち向かい、国民の手であらためて民主主義的統治を取り戻そうとする意思表示・挑戦。

(3)「信頼」と「自発的規律性」を合言葉にした国民運動による「コロナ危機」克服。

7. 応急的対応段階から 地方財政主導の本格的復興段階へ

(1) 復興計画の合言葉

—もとに戻るのではなく、「よりよい社会への提供」
(build back better)

(2) スウェーデンの2021年度予算(9月21日国会提出)

- ・基本方針「危機対応から雇用創出へのシフト」
- ・「危機からの連携による脱出」
- ・環境分野と福祉分野での雇用創出

(3) 生活の「場」としての地域社会の再創造